張潮の書簡に見られる『虞初新志』の編集状況について

小塚由博

はじめに
1．張潮および『虞初新志』について
2．書簡に見られる『虞初新志』の編集状況について（一）
3．書簡に見られる『虞初新志』の編集状況について（二）
おわりに

はじめに

清初の文人張潮は、揚州を據點に様々な文人と交遊を重ね、彼らの小品作品を多數集めた3種の叢書を編纂するに至った。一方、張潮の書簡集（『尺牘友聲偶存』〈張潮が友人に宛てた書簡を集める。約450通〉および『尺牘友聲集』〈友人が張潮に宛てた書簡を集める。約1000通〉）には、張潮を中心とした清初の文人たちがどのような文學的活動を行っていたのか、その一端が窺える。そしてその中には、叢書が編集される過程がある程度詳しく記されているもの

も少なくない。そこで3種の叢書について記述されている書簡を取り上げ、その内容について調査考察することによって、その編集状況や交遊關係の實態を明らかに出來るのではないか、と考えている。本論では、その一環として3種の叢書のうち最も早く編纂が企圖された『虞初新志』の編集状況に關する記述を書簡中より取りあげ、その編集状況の一端について考察を加えることとしたい。

1. 張潮および『虞初新志』について

①張潮と3種の叢書

張潮（一六五〇―一七〇九？）字は山來、號は心齋居士・三在道人。安徽歙縣［新安］の人で、のち揚州に居を移した。祖先は地元の名家で、商賣（鹽商）をしていた。父習孔（一六〇六？―？。字は念難、號は黄嶽）は順治六〈一六四九〉年の進士で、山東提學僉事となった。張潮自身は十五歳で諸生となり、二度科擧（鄉試）に應じたが落第している。のち官吏の道を諦めて揚州に移り、作品の制作や叢書の編集出版に力を注ぐようになっていった。

『古文尤雅』『四書會意解』『心齋詩鈔』『心齋聊復集』『笙詩補辭』『詠物詩』『心齋雜俎』『奚囊寸錦』など多數の作品を世に遺したが、中でも當時流行した小品文を集めた叢書の編者として、また警句集『幽夢影』の作者として有名である。

さて、その張潮の半生に亘る事業と言うべきものが3種の叢書つまり『虞初新志』『檀几叢書』『昭代叢書』の編集・出版である。本論の中心となる『虞初新志』の詳細については後述することとして、まずはその3種の叢書について以下簡單に記しておく。

『虞初新志』二十卷。康熙二十二〈一六八三〉年自序、康熙三十九〈一七〇〇〉年總跋。
テキストによって若干異なるが、約80名150作品を收錄。

『檀几叢書』初集・二集各五十卷［1卷1作品］、餘集上・下卷［56作品］
初集・二集は康熙三十四〈一六九五〉年刊行、餘集は凡そ康熙三十六〈一六九七〉年から康熙三十九〈一七〇〇〉年の間に刊行？
王晫（字は丹麓、號は木菴。浙江仁和［杭州］の人）と共編。
全112名156作品

『昭代叢書』甲集・乙集・丙集各五十卷［1卷1作品］
甲集は康熙三十五〈一六九六〉年、乙集は康熙三十九〈一七〇〇〉年、丙集は康熙四十二〈一七〇三〉年刊行。
丙集は弟張漸と共編（丁集以下は時代・編者が異なる）。
全90餘名150作品

三種類とも當時流行した文言小說・筆記・雜記など小品文［短編の文章］を集めたものであり、歷史上の作品ではなく張潮が生きたリアルタイムの作家の作品を集めているのが特徵（友人、知人たちの作品が中心）である。編集期間は一六八〇年頃～一七〇〇年代前半ぐらいまでの間と推定される。

②『虞初新志』の内容について

『虞初新志』の「虞初」とは、むろん文言小説の祖とも言われる前漢の方士虞初[1]（黄車使者）のことであるが、直接的には明代中頃に編集された文言小説集『虞初志』から影響を受けている。例えば、『虞初新志』の自序（一六八三年新秋）の後半部分に於いて以下のように記している。

…此虞初一書、湯臨川稱爲小説家之珍珠船、點校之以傳世、洵有取爾也。獨是原本所撰述、盡唐人軼事、唐以後無聞焉。臨川續之合爲十二卷。其閒調笑滑稽離奇詭異、無不引人着勝、究亦簡帙無多、蒐采未廣。豫是以慨然有虞初後志之輯、需之歲月始可成書、先以虞初新志授梓問世。其事多近代也、其文多時賢也。事奇而覈、文雋而工。寫照傳神、彷摹逼肖。誠所謂古有而今不必無、古無而今不必不有。且有理之所無、竟爲事之所有者。讀之令人無端而喜、無端而愕、無端而欲歌欲泣。誠得其眞而非僅傳其似也。夫豈彊笑不懽、彊哭不戚、餖飣補綴之稗官小説可同日語哉。學士大夫酬應之餘、伊吾之暇、取是篇而瀏覽之、匪惟滌煩袪倦、抑且縱横俛仰、開拓心胸、具達觀而發曠懷也已。

（…この虞初の書〈虞初志〉は、湯臨川〈顯祖〉が小説家の珍珠船と稱したもので、これを點校して世に傳えたのはまことに取るべき價値がある。ただ原本で述べているものは、すべて唐人の軼事であり、唐以降のものは存在しない。臨川はこれに續けて〈『續虞初志』？〉合して十二卷とし、その調笑、滑稽、離奇、詭異な内容は、人を引きつけないものはないが、簡帙は少なく採集〈範圍〉も廣くない。私はそこで心を奮い起こして『虞初志』の後輯を作ろうと思い、このために歲月を費やし、やっと書が完成した。まずともかくも『虞初新志』を世に出した。その内容は、近代のものが多いし、その文章は時賢が作ったものばかりである。事跡は奇にして行き渡り、文章は雋にして巧みである。描寫は神を傳え、模倣は本物に逼る。まことに所謂「昔有ったものが必ずしも今も無いとは限

らず、昔無かったものでも今存在しないとは限らない」〈不詳〉ということです。その上、道理に叶っていなくとも結局その事は存在するもので、これを讀めば人は理由がなくとも喜び、驚き、歌ったり、泣いたりする。まことにその點を得てその類似點だけを傳えるのではない。それはどうして笑いを強いて樂しめず、泣きを強いて悲しめず、人物や事柄を竝べたてるだけの稗官小說と日を同じくして語ることができようか。學士大夫の應酬や讀書の餘暇に、この編を手に取ってご覽になれば、世の煩わしさや疲れをきれいに洗い流せるだけではなく、氣ままに俯仰したり、心を豐かにして、達觀する力を身につけて、懷を開かせることでしょう）

『虞初志』は弘治〈一四八八―一五〇五〉、正德〈一五〇六―一五二一〉年間以降の編纂とされており、[2]當初は八卷だったようである。編者は不明であるが、湯顯祖（一五五〇―一六一六）、王穉登（一五三五―一六一二）、歐大任、凌性德（短編白話小說集「二拍」の編者凌蒙初の一族とされる）の序文が有る。また袁宏道（一五六八―一六一〇）の參評が附され、さらに屠隆（一五四二―一六〇五）の點閲が施されている。張潮が言及している湯顯祖の續編（『續虞初志』四卷）が現存するのか否かは不明であるが、張潮はこの『虞初志』が唐代の作品しか收錄しておらず、また湯顯祖の續編も採集範圍が狹いことを指摘し、『虞初新志』編集に至った、ということである。[3]

③『虞初新志』について

まずは編集期間であるが、かつては單純に張潮の自序が制作された一六八三年に現存の二十卷本が完成したとされていた。[4]あるいは、一七〇〇年に總跋が制作されていることから、一七〇〇年刊行ともされる。その後の研究[5]などから凡

そ一六八〇年以前より採集が行われ始め、一七〇〇年代前半ごろまでに完成されたと考えられるが、その實態はよく分からない。しかし、後述の通り書簡の記述を調べてみると、もう少し具體的な狀況が見てとれる。

主なテキストは以下の通り。（掲載作品や書名が若干異なる）

古本小說集成本―康熙刻本の影印（上海圖書館藏本）。全143作品

乾隆重刻本―康熙庚辰［乾隆二十五〈一七六〇〉年］重刻本。張繹［張潮の子孫］校訂。巾箱本。全150作品。

虞初合志本―排印、上海書店、虞初志合集之二、一九八六年（一九二六年掃葉山房書局本復印）。全150作品。

和刻本―荒井公廉訓點、文政六（一八二三）年本、嘉永四（一八五一）年本など。乾隆重刻本に據る。

『虞初新志』には、當時の樣々な文人たちの小品作品が收められている。例えば、作者としては陳鼎（13）、周亮工（元亮、9）、鈕琇（9）、徐芳（8）陸次雲（6）、魏禧（4）、毛奇齡（4）、王猷定（4）、朱一是（3）、王晫（3）、余懷（3）、侯方域（3）、王士禎（2）、毛際可（2）、陳玉璂（2）、高士奇（1）、錢謙益（1）、杜濬（1）、李漁（1）、方苞（1）、毛先舒（1）などであり〈（　）內は收錄作品數〉、代表的な作品としては、魏禧「大鐵椎傳」〈卷一〉、林嗣環「秋聲詩自序」〈卷一〉、宋曹「義猴傳」〈卷一〉、余懷「寄暢園聞歌記」〈卷四〉、侯方域「郭老僕墓誌銘」〈卷七〉、余懷「王翠翹傳」〈卷八〉、陳鼎「烈狐傳」〈卷十〉宋犖「筠廊偶筆」〈卷十〉、陸次雲「陳圓圓傳」〈卷十一〉、侯方域「李姬傳」〈卷十三〉、徐喈鳳「會仙記」〈卷十四〉、繆彤「述怪記」〈卷十五〉、周亮工「書姜次公印章前」「因樹屋書影」〈卷十六〉、「閔公子傳」〈卷十七〉、王言「聖師錄」〈卷十八〉、南懷仁「七奇圖說」〈卷十九〉、鈕琇「燕觚」〈卷十九〉、余懷「板橋雜記」〈卷二十、後錄〉などがある（〈　〉內は所在卷數）。

2. 書簡に見られる『虞初新志』の編集状況について（一）

①『虞初新志』「凡例十則」に見られる編集状況[6]

『虞初新志』には張潮の「凡例」が附されており、十個の段落に分かれている。試みにその内容に従って各々簡單に見出しを附けると、以下の通りになる。

①『虞初新志』について、②各作品の作者の氏名、③各作品の作者、④類似する内容を有する複數の作品の取捨選擇、⑤作者氏名の表記、⑥掲載の順番と作品の提供、⑦評語について、⑧掲載作品の收集と募集について、⑨出版の目的、⑩今後の出版物

この中でも特に本稿で述べる編集状況に關わる記述は、④、⑥、⑧、⑨の4つである。④については後述することとして、⑥、⑧、⑨の内容について簡單に纏めておこう。なお、原文はそれぞれ注に提示した。

⑥「掲載の順番と作品の提供について」[7]は、その名の通り作品の掲載基準と作品の提供依頼について述べた凡例である。前半部分では、『虞初新志』の作品收録は、建前として到着した順番に掲載し、年功序列や、人間關係などで決めない、と言及している。また、後半部分では張潮との交遊具合や、知り合いかどうかなどは問わないので、今後も作品を寄贈するよう周知している。果たして本當にその通りだったのか否かについては議論の餘地があるものの、以上のことから『虞初新志』が季刊刊行物のように順に編集され、出版されていた様子が窺える。また、この凡例を制作した時

點で、更に『虞初新志』を續けて刊行する豫定であることも見てとれる。

⑧「掲載作品の收集と募集について」[8]は、前半部分では張潮自身がつねづね『虞初新志』に掲載されているような小品作品を愛好し、探し求めていたことがわかる。後半部分では⑥と同じく他者の作品を募集している。これは自著だけではなく、所藏する他者の作品の提供も含まれる。

⑨「出版の目的」[9]では、「軼事を表彰」し、「奇文を集め傳える」という目的を述べる一方で、營利が第一義ではないことを强調している。そして出版にかかる必要經費（紙代・印刷代など）については求めても、手數料などは求めない、とすることでなるべく氣輕に作品を投稿できる環境を設定し、多くの作品を集めようとしている様子が窺える。つまり、『虞初新志』は小品作品を收集して出版し、後世に遺すことが第一の目的であり、建前として作者は出版代のみ負擔する、ということである。

以上の點からも『虞初新志』の編纂には、書簡が盛んにやりとりされていたと想像されるが、實際に書簡集を調査すると、關連する書簡が少なくない。

②張潮の書簡集（『尺牘友聲集』及び『尺牘友聲偶存』）について

さて、本題に入る前に本稿で使用する張潮の書簡について簡單に述べておきたいが、詳しくは拙論[10]を參照されたい。

『尺牘友聲集』は友人が張潮に宛てた書簡を集めたものであり、三集各五卷、計十五卷[11]。約３１０名、１０００通餘の書簡が收錄されている。各卷冒頭に「隨到隨鈔、不分爵里」（到着した順に收錄し、爵位や出身地で分類しない）と記されている。現存のテキストには康熙五十九［一七二〇］年、蔡方炳（九霞、湖南平江の人）の序文が有るが、書

簡中にしばしば「尺牘友聲」という書名が登場することから、張潮の存命中に既に編纂され、出版されていたようである。書簡の題名［宛名］は「與張山來」で統一されている（初集は無し）。

もう一方の『尺牘友聲偶存』は逆に張潮が友人に宛てた書簡を集めたもので、全十一巻であり、約170名450通餘の書簡が収録されている。陳軾〈道開、江蘇雲閒の人〉の序文が有る。こちらはそれぞれ題名［宛名］が附いている。[12]

どららもほぼ書簡が到着した順［『尺牘友聲集』］か書簡を制作した順［『尺牘友聲偶存』］で竝べられており、ある程度の年代を推定することができる。現段階ではまだまだ推測の域を超えないが、凡そその年代は一六八〇［康熙十九］年前後から一七〇五［康熙四十四］年ぐらいまでの書簡であり、これは張潮がちょうど叢書を編纂した時期と大體重なる。

書簡の内容は、知識の提供・交換、面會や宴會の約束、各種禮狀、作品の制作依頼など様々である。特に張潮の場合は、作品の制作や收集、校訂や編集に關する書簡が多い。とりわけ『幽夢影』の序文・評語の制作依頼や前掲3種の叢書に掲載する作品の執筆や採集の依頼、更に校閲やスポンサーの募集など、場合によってはかなり詳細な記述が存在する。また、實際に作品や原稿を添えて送ることもあり、當時の郵便事情まで窺うことができる。宛名〈または差出人〉は江南の人物が多いが、北京や四川などの人物もおり、かなり廣範圍に亘る。

ところで、當時の書簡の傳達は、公式文書の傳達は驛亭制度によって古くから存在し確立しているが、民閒の郵便事業（民信局）が登場するのは早くとも清代中期から後期頃であり、それまでは個人的に傳達を依頼するしかなかった。その傳達者は親族、使用人、友人、商人、僧侶などであり、當然書簡が届かないこともしばしば起こり、また届くのに數ヶ月以上を要す場合も珍しくなかった。

張潮の場合、叢書の編纂過程において多數の書簡をやりとりする必要があり、場合によっては、書簡に作品の原稿や

完成した作品、抜き刷りなどを添えて送っていた。

以下、具體的に各書簡を見ていこうと思うが、本稿では『尺牘友聲集』を『友聲』、『尺牘友聲偶存』を『偶存』と稱すこととし、また拙稿「張潮『尺牘友聲集』『尺牘友聲偶存』研究資料編[18]」の通し番號を振った。

③作品の贈呈について

さて、まずは基本的なデータを確認しておきたい。

『虞初新志』に關する書簡は、『友聲』中に56通、『偶存』中に26通存在しており、初出は『友聲』72（甲集）の王煒（字は雄石、號は不菴、安徽歙縣の人）からの書簡、『偶存』44（卷一）「與吳街南徵君」つまり吳蕭公（一六二六―一六九九。字は雨若、號は街南、安徽宣城の人）への書簡である。最後は『友聲』1007（新集卷一）の張鼎望（字は荊觀、號は冷公、陝西涇陽、親族）からの書簡で、『偶存』418（卷十）「寄復葛常夏」つまり葛常夏（字は文度、江蘇淮安の人）への書簡である。期間にすると、およそ一六八〇年前後から一七〇五年ぐらいまでの書簡に見られることとなり、『虞初新志』に關する書簡がかなり長い期間でやりとりされていたことがわかる。

なお、文末に關連する表（表1～3）を擧げたので適宜參照されたい。

a.『虞初新志』の贈呈（張潮→友人）

まずは張潮が『虞初新志』を贈呈した旨記した書簡であるが、これはあちこちに見ることができる。なお、『虞初新志』だけではなく、他の編集・制作作品の贈呈について記した書簡も少なくない。例えば、張惣（字は僧持、號は南村〔邨〕、江蘇江寧、親族）への書簡に「虞初拙選暨聊復集小刻各一部郵上。（『虞初新志』および『聊復集』小刻各々一部、

郵送させていただきます[14]」とあったり、張榕端（字は樸園、河北磁州の人）への書簡に「所選虞初新志呈上。（編纂した『虞初新志』を呈上します[15]）」などとある。

b．贈呈の依頼（友人→張潮）

『虞初新志』は、當時の文人たちの間でかなり話題となったようで、『虞初新志』の贈呈を希望する文人たちは多かった。彼らは書簡でその寄贈を依頼した。例えば、巫敬輿（字は德士、安徽當塗の人）からの書簡には以下のように記されている。

耳先生名已久。客遊邗江、歳聿云暮、不及晉謁臺階。企仰殊甚。適從敝年叔邱柯村先生案頭讀大刻韻牌・集字詩・虞初新志等書。眞獨出心裁、超絶千古。…謹奉紙價少許、祈惠我數帙。載之行笥、時一開展如晤張緒風流、則鄙人幸甚。

（先生のお名前を以前よりずっと耳にしておりました。邗江［揚州］に遊び、歳が暮れようとしているのに、あなたに拜謁するに至っておりません。たいへんお慕いしております。たまたま我が叔父邱〈丘〉柯村先生の机上で大刻『韻牌』『集字詩』『虞初新志』等の書を拜讀いたしました。眞に獨創的で、千古に冠たる作品です。…謹んで紙代少しばかりを差し上げますので、私に數帙を惠んでいただけることを願っております。これを行笥に載せて、時に開けばまるで張緒〈劉宋の人〉の風流に會うようであり、田舍者〈たる私〉も非常に幸福であります[16]）

邱柯村とは丘元武、字は柯村。山東諸城の人。順治十六［一六五九］年の進士のこと。張潮との書簡も遺されている

が、これに關連するものは見當たらない。

その他にも錢岳（字は蘊生、號は十青、江蘇蘇州の人）からの書簡には「…虞初新志有印出者、乞賜一部。破征車旅店長夜之寂。…（『虞初新志』で印刷したものが有れば、一部頂戴したく存じます。旅の道中や旅館での暇つぶしにします）」[17]とある。その他、殷署（345〈丁集〉[18]、355〈丁集〉[19]）、陳鵬（348〈丁集〉[20]）、吳從政（373〈戊集〉[21]）、程雲鵬（427〈戊集〉[22]）など、『虞初新志』の贈呈を求める書簡は少なくない。また、人から頼まれて、『虞初新志』を求める者も存在する。例えば、劉彬（安徽歙縣の人）の書簡には次のように記されている。

…吾鄉梅村葉瑞屏先生、爲建德廣文、晤閒深慕老世臺。佳刻虞初新志、心儀久之、囑弟到揚、搆求一冊。以爲案頭清賞。倘蒙推分惠一冊、足徵雅愛多矣。…

（…吾が鄉の梅村葉瑞屏先生〈不詳〉は、有德廣文の士で、お會いするたびに〈？〉深く老世臺〈あなた〉のことをお慕いしているとのこと。佳刻の『虞初新志』は、長い閒お望みしているものであり、私は揚州に行って一冊求めてくるよう頼まれました。きっと書齋でお讀みになって樂しまれるのでしょう。もし一冊お分け頂ければ、めで愛するに足りるでしょう…）[23]

一方で、人氣があったためなのか、それとも發行部數の都合なのかわからないが、一時的に『虞初新志』をなかなか入手できない狀況だったようである。例えば、顧彩（一六五〇―一七一八。字は天石、江蘇無錫の人）からの書簡には「…雨牕無聊、意欲再借別種遣睡。尊刻新虞初既不可得、竊意舊虞初志必爲案閒所有。幸簡出借觀。…（雨の日や無聊な時に、また別の種類［の作品］をお借りして睡りにつきたいと思います。尊刻の「新虞初」〈『虞初新志』〉は既に入

手することができず、ひそかに「舊虞初」〈或いは湯顯祖編『虞初志』のことか〉ならばきっと机の上にお有りかと思います。お借りして觀ることができれば幸いです[24]」とあったり、また先ほどの錢岳もその後すぐには手に入れられなかったようで、「…向所懇虞初新志一書未蒙惠下。今有便羽至令姪處、附侯興居。伏冀、慨賜以爲枕祕、朝夕捧讀、拜德無崖矣。…（以前希望しました『虞初新志』ですが、まだ頂戴しておりません。今便人（手紙を運ぶ人）が持ってきた手紙が甥御様の處にやってきて、〈便人が〉逗留しております。切に願うのは、〈『虞初新志』を〉頂いて枕中の祕としたいことで、〈そうなれば〉朝夕拜讀して〈あなたの〉德をずっと崇拜致したく存じます[25]」と催促の書簡を寄せている。そして、友人に『虞初新志』を奪われたので、再び寄贈して欲しいと願う者も存在した。例えば、殷署（字は日戒、號は竹溪。安徽歙縣の人）は、

…前蒙賜佳稿及新志等刻、舍表弟歆慕之至弟處。有重者、爲友索去而此行亦未置笈中。倘遇便人到蕪、祈各寄一部于某翁處。可以早晩郵示。…

（…以前佳稿及び『〈虞初〉新志』等の作品を賜り、我が表弟〈不詳〉が羨ましがって私の處にやってきました。〈『虞初新志』など張潮の作品を〉重んずる者がいて、友人に持って行かれてしまい、この道中もまだ背負子の中に入っておりません。もし便人で蕪〈揚州〉に行く者に遇えましたら、一部ずつ私のところに送っていただこうと願っておりました。至急お送り下さい…[26]）

と記しているし、他にも宋曹（246〈丙集〉[27]）、江之蘭（363〈丁集〉[28]）、陳軾（521〈庚集〉[29]）などの書簡に見られる。果たして、この「奪われた」というのが額面通りに受け取ってよいのか否かはともかく、『虞初新志』が文人たちの間でか

なりの人氣を博していたことがわかる。

先ほど友人に『虞初新志』を奪われた陳軾は、同じ書簡（『友聲』521〈庚集〉）において「…至所載虞初新志・檀几叢書・禪世說等書、卷帙必繁、紙價多費、未敢固請。倘有副本乞借一觀、少遲返璧。（『虞初新志』『檀几叢書』『禪世說』等の書に至っては、卷帙がきっと多く、紙代も高額になりますので、敢えて無理には求めません。もし副本が有れば、お借りして一讀させていただき、しばらくしてお返し致します）」と述べ、寄贈が無理ならお借りしたい、との旨を記している。

そこで贈呈に代價（紙代・印刷代など）を提示する書簡も少なくない。例えば、前掲の王煒は「…虞初欲得者多、印出望惠數部。（『虞初新志』を希望する者が多いので、印刷して數部を頂戴したく存じます）」[30]と記しているし、また汪穎（遯漁、安徽歙縣の人）も「…更求大集中昭代檀几二叢書・虞初新志・唐詩韻牌・聊復集・友聲前後集。理宜奉紙資呈上。（更に大集のうち『昭代叢書』『檀几叢書』『虞初新志』『唐詩韻牌』『〈心齋〉聊復集』『友聲』前・後集を希望します。紙代を奉じて呈上します）」[31]と書簡を寄せている。

④作品の掲載依頼と謝禮

a．作品提供のお願い（張潮→友人）

張潮は前述の凡例通り、『虞初新志』に收錄すべき作品を探していた。それは既に版刻濟みのものでもよかったようであったが、その募集を行うのと同時に、叢書に收錄すべき作品の情報についても廣く募集していた。例えば、甘表（中素、江西南豐の人）への書簡には、「…倘於諸相知處、有可採入虞初志者、乞爲郵下。多多益善耳。（もしもご存知の方で、『虞初〈新志〉』に採錄すべきものがありましたらお送り下さい。多ければ多いほど有り難いです）」[32]とある。

なお、甘表の「趙希乾傳」も『虞初新志』（巻八）に収められている。また、吳雯炯（字は鏡秋、安徽歙縣の人）は「…外唖孝子傳一册附上、似可入虞初新志。（ほか「唖孝子傳」一册附上しましたが、『虞初新志』にお入れ下さったようですね）[33]」と述べているが、「唖孝子傳」（『虞初新志』巻十五）は吳雯炯自身の作ではなく、王潔の作である[34]。このように、他者の作品を張潮に紹介する例も少なくない。

張潮が頻繁に書簡をやりとりしていた人物が何人かいるが、中でも王晫は張潮と同じく作品編集・出版に關する同志として幾度も書簡を交わしており、その中には編集作業に關する書簡も數多く殘っている。例えば、張潮は王晫に寄せた書簡で、「近晤陸雲士先生以所選文繪三集見示。其中可入虞初新志者頗多（近頃陸雲士先生が編纂した『文繪』三集を見せてくれました。その中には『虞初新志』に入れるべきものが澤山あります）[35]」と述べている。陸雲士とは陸次雲（字は雲士、浙江錢塘の人）のことで、張潮の叢書に多數作品が掲載されており[36]、その後王晫經由で陸次雲の作品を入手した張潮は「拙選叢書乙集、餘集、虞初新志俱借光大著、以增榮寵（拙選の『〈昭代〉叢書』乙集、『〈檀几叢書〉餘集』、『虞初新志』ともに〈あなたの〉大著に威光をお借りしてますます箔が附きました）[37]」云々と禮を述べている。この書簡は、王晫に陸次雲の作品の情報を傳えたものである[38]。

そして、實際に作品を寄せたり、作品の情報を提供してくれた友人に對して禮を述べた書簡も多い。例えば、王士禎（一六三四―一七一一。字は貽上、號は漁洋山人、山東新城の人）に對して、「內紀劍俠一篇、借光選入虞初新志中、不必更入叢書也。（うち「劍俠」を記した一篇は、威光をお借りして『虞初新志』に入れさせていただきましたが、〈あなたのすばらしい作品を〉更に叢書に入れるには及びません）[39]」と述べている。王士禎の「劍俠傳」は『虞初新志』の巻九に收められている[40]。王士禎については後述するが、張潮の三種の叢書には彼の作品が計十一作品も收められており、書簡のやりとりも多い[41]。

次は掲載の依頼（または作品の投稿）について記した書簡（友人→張潮）である。例えば、明末から清初にかけて活躍した文人余懐（一六一六―一六九六、字は澹心、福建莆田の人）は、明の時代は縣の秀才であったが、清には仕えず隱居した。そのため自ら書籍を出版できる立場になく、現存している余懐の作品で單行のものの多くは抄本で、後は他者の叢書に收められたもので、特に張潮の叢書に多くの作品を收錄している。[42] もともと余懐が賣り込んだのか張潮が依頼したのかわからないが、余懐は以下のような書簡を張潮に寄せている。

…拙作三本、想已抄錄一二篇。乞將原本發下弟家。抄存友人小品甚多、回蘇當竝弟作彙寫一册寄送、刻入虞初集中也。

（拙著三本のうち、すでに一、二篇は〈『虞初新志』に〉抄錄されたと思います。原本［小塚注：後述八卷本『虞初新志』のことか］を私の家にお送り下さい。友人の小品を抄錄したものが澤山あります。蘇州に歸って私の作品とともに一册に纏めてお送りしますので、『虞初新志』中に載せて下さい）[43]

これは余懐が揚州に張潮を訪ねた際に制作したもので、おそらくその歸り際に寄せたものではないか。「已抄錄一二篇」とは「寄暢園聞歌記」（卷四）、「王翠翹傳」（卷八）のことか。そしてもう一つまだ掲載されていないのは「板橋雜記」のことであろうか。

これに對する直接の書簡かどうかはわからないが張潮は、「虞初拙選借光王翠翹傳。茲先以八卷成書。聽坊人發兌、想明春吳門亦可購矣。嗣有二集之役、鴻篇幸早郵。（我が『虞初新志』はあなたの「王翠翹傳」〈卷八所收〉のお陰で箔が附きました。まずは八卷で一書とします。書坊が印刷して賣りに出すとのことですので、來春には吳門〈蘇州〉でも

買い求めることができるでしょう。續いて第二集の編集がありますので、あなたの作品を早くお送り下さい[44]」と寄せている。ここで言う「來春」が果たして何年なのかよくわからない。後述の通り、八卷本の完成は一六八三年であるが、先の余懐が寄せた書簡は一六九三年ごろのものと推定される。「吳門でも…」ということなので、あくまで蘇州での發賣年ということなのかもしれない[45]。

前掲の王晫は張潮とともに『檀几叢書』を編纂した仲間でもあり、別の叢書に關する編集作業も行っていたようである。また、王晫自身の作品も、張潮の叢書に多數掲載されている。例えば、王晫は「…拙集内有紀陸子容事一篇、向蒙許入虞初新志。如已補入可印、一篇賜覽否。…（…拙集のうち「紀陸子容事」一篇は、以前『虞初新志』に入れていただけるお許しをいただきました。もしすでに補入して印刷していただいていれば、一部お見せいただけないでしょうか[46]）」と述べている。さらにその後間もなく寄せた書簡[47]にはこれと一字一句まったく同じ文面が書かれている。これは、すぐに張潮から返信が來なかったため催促したものなのであろう。

次に、王士禎の例をみてみよう。

…前奉寄皇華紀聞・廣州遊覽小志・蜀道驛程記三書、不知尚可節錄以入尊撰否。…

（以前進呈致しました『皇華紀聞』『廣州遊覽小志』『蜀道驛程記』の三書ですが、なお節錄してあなたの叢書にお入れ頂けましたでしょうか[48]）

『皇華紀聞[49]』は『虞初新志』卷九に、『廣州遊覽小志[50]』は『昭代叢書』乙集に收められているが、『廣州遊覽小志』はもともと『粤行三志』の四卷目に收められていた。また『蜀道驛程記[51]』そのものは張潮の叢書に掲載されていないが、

その一部（「兩漢水［東西］辨」）は『昭代叢書』乙集に節録され收められている。[52] なお、『皇華紀聞』は康熙二十三年に王士禎が職務で南海地方に赴いた時の[53]作品であり、もともとは全四卷であるが、『虞初新志』中に收められたものは王士禎の言葉通り節録である。[54]

その後少しして、王士禎は再び書簡を寄せ、以下のように記している。

…又所寄拙著皇華紀聞粤行三志內遊覽小志、可先單刻。蜀道驛程記數種、不知各有可採否。至驛程記中之兩漢水［東西］考、三志之劉龔墓辨或以卷帙稍繁、摘錄亦唯酌之。…

（…またお寄せした拙著の『皇華紀聞』、『粤行三志』內の「〈廣州〉遊覽小志」は先に單刻すべきものです。『蜀道驛程記』數種はそれぞれ採用していただけますでしょうか。『〈蜀道〉驛程記』中の「兩漢水［東西］考［辨］」〈『昭代叢書』乙集〉、『〈粤行〉三志』の「劉龔墓辨」に至っては、或いは卷帙が多いので、摘錄しても仕方がありません〈？〉）[55]

前述の通り、『虞初新志』に採錄されている「皇華紀聞」（『虞初新志』卷九）は節錄であり、その中に「劉龔墓」に關する話も揭載されている。なお、現存する『粤行三志』には「劉龔墓辨」は收錄されていないので、もしかするともともとは『粤行三志』中に存在したのか、それとも書名を間違えたのかもしれない。

これに對する返信と思われるが、張潮は「大著皇華紀聞內、劉龔墓辨已借光梓入拙選虞初新志中。此書不日可成嗣、容寄呈臺覽。（大著『皇華紀聞』の內で、「劉龔墓辨」は已にご威光をお借りして『虞初新志』中に入れさせて頂きました。この書は閒もなく完成致します。お寄せ致しますので、ご覽下さい）」[56] と寄せている。

なお、張潮は『皇華紀聞』に附した評語で、「皇華紀聞凡四卷、先生奉使南海時所筆記也。余竊僭取異事數條、蓋欲與拙選相類云爾。倘讀者欲觀全豹、則自有原書在。(『皇華紀聞』全四卷、先生が南海に使者に赴いた際の記錄です。私はひそかに異事數條を取りましたが、拙選〈『虞初新志』〉と互いに近づけようと思っただけです。もし讀者諸君でその全貌を見たいとお望みならば、原書があります〈ので、ご覽下さい〉)」と述べている。

3. 書簡に見られる『虞初新志』の編集狀況について(二)

①八卷本から二十卷へ

a. 八卷本

張潮が自序を制作した一六八三年の段階では、八卷分しかなかったようである。劉和文氏は著書において、八卷本の存在を指摘している。[37] ただし、八卷本という形で現存する『虞初新志』は管見の限りでは見つけることが出來ない。なお、直接の關係があるか否かは不明だが、この八卷という數は前述の『虞初志』と同じである。

以下、書簡から『虞初新志』の卷數について記述のあるものを取り上げてみることにするが、それによると、『虞初新志』は一七〇〇年以降に完成するまでの閒に、少しずつ卷が附け加えられていったことがわかる。

例えば、一六九三年頃に寄せられたと思われる宗元鼎(一六二〇—一六九八。字は定九[鼎九]、江蘇江都の人)の書簡には、『虞初新志』を讀んだ感想を以下のように記している。

讀虞初新志如魏氷叔之大鐵椎傳、李笠翁之新淮健兒傳、方邵邨老神事、徐野君汪十四傳、林鐵崖秋聲詩自序、徐仲

光神鍼記、皆足驚人耳目、開拓心胸、佳選眞奇書也。

（『虞初新志』を拝讀しましたが、魏冰叔〈禧〉の『大鐵椎傳』〈巻一〉、李笠翁〈漁〉の『秦淮健兒傳』〈巻五〉、方邵邨〈亨咸〉の「老神事〈『記老神仙事』〉」〈巻二〉、徐野君〈士俊〉の『汪十四傳』〈巻二〉、林鐵崖〈嗣環〉の『秋聲詩自序』〈巻一〉、徐仲光〈芳〉の『神鍼記』〈巻四〉は人の耳目を驚かし、心を開放させるに足る作品で、〈これらの〉作品を集めた〈『虞初新志』は〉眞に奇書であります[58]）

この書簡に登場する作品は、巻一から巻五までであり、前述の余懐と張潮のやりとりも合わせて考えると、一六九三年前後には、まだ『虞初新志』は八巻までしか完成しておらず、引き續き作品を募集している段階であったと推測される。それが次の段階に至るのは一六九七、八年ごろのことである。

b．八巻＋四巻＝十二巻

王晫に寄せた書簡で以下のように記している。これは一六九七、八年頃の書簡である。

弟此選向止八巻、今可得四巻、其爲一十二巻。大作紀陸子容事在第九巻內。緣編號未完、不能刷印。明春定可告成矣。

（この我が叢書は先に八巻までで止まっていましたが、今〈新たに〉四巻を得て、十二巻となります。あなたの「紀陸子容事」は第九巻に在りますが、編號がまだ完成していないため、印刷することができません。來春にはきっと完成することでしょう[59]）

これは前掲の王晫が寄せた『友聲』659・669への返信であろうか。いずれにせよ、來春〈一六九八、或いは九年？〉に新たに四巻が附け加わり、十二巻となることが記されている。

また、別の王晫の書簡には、「…伏惟鑒定大選虞初新志十二巻、弟内止一篇。…。拙作看花述異記、偶因一夢敷衍成文。久欲附入虞初尊選。…（思いますに、大選の『虞初新志』十二巻を鑒定しますと、私〈の作品〉はうち一篇〈巻九「紀陸子容事」のことか〉に止まっております。…拙作の「看花述異記」はたまたま一夢を敷衍して文章としたものです。ずっと尊選の『虞初新志』に入れて頂きたく思っております[60]）」とある。これもやはり一六九八年前後の書簡と推定されるが、『看花述異記』は『虞初新志』の巻十二に收められており、この頃十二巻目の編集が行われ、出版されようとしていたことが窺える。

翌一六九九年ごろに陸次雲に寄せた書簡には、「附上虞初新志一部、其後四巻、係續增者内借光大著種種、欲籍名篇以流通、弟亦可因以不朽也。新著不知又增幾許、并希示教爲荷。（お附けした『虞初新志』一部、その後四巻、續けて增す者の内に威光をあなたの大著種々にお借りして、名篇を載せて流通させ、私〈の叢書〉もまた不朽なものにしたいと思います。新著がまた何篇かお增えになったかわかりませんが、お教え下されば幸いと存じます[61]）」と記されており、また同年の書簡と推定される張榕端への書簡でも「又拙選虞初新志向止八巻、今續增四巻、共十二巻。附呈臺覽。（さらに拙選『虞初新志』は先に八巻止まりで、今續けて四巻を增加し、ともに〈あわせて〉十二巻となりました。進呈致しますのでご覽下さい[62]）」と述べており、この頃十二巻まで完成したことは間違いないであろう。

c．八巻＋四巻＋八巻＝二十巻

それではいつ現行の二十卷本になったのであろうか。吳陳琰（字は寶崖、浙江錢塘の人）に寄せた書簡に「…大著曠園雜著、得未曾有快絕。惜弟虞初拙選已成、不獲借光爲悵悵耳。…（…大著の『曠園雜著』ですが、未曾有の爽快さを得ました。殘念なことに拙選の『虞初新志』はすでに完成してしまい、威光をお借りできないのが恨めしく思います。…）」[63]と記されている。

「曠園雜著」とは恐らく『曠園雜志』上・下卷（『說鈴後集』に收められる）のことで、その序文は康熙四十二〈一七〇三〉年制作であり、この書簡はその頃のものであろうか。いずれにせよ、この頃には『虞初新志』の編集は終了し、新たな作品は採用しなかったと考えられる。なお、吳陳琰は『說鈴』の編者、吳震方の弟である。

また、張潮の親族である張鼎望に寄せた書簡には、「虞初新志所奉寄者、似是一十二卷、今又續成八卷。二十卷竝呈上。…（…『虞初新志』でお寄せしたのは、十二卷〈まで〉のようで、今さらに續けて八卷が完成しました。二十卷全て呈上致します。…）」[64]とある。これは一七〇二年ごろの書簡と推定される。

ただし、『虞初新志』が二十卷セットで文人たちの手に屆くのには時間を要したようである。例えば、王晫は「…虞初新志、弟處未有全書。乞賜一部以爲帳祕。…（…『虞初新志』は、私もまだ全て揃っておりません。一部賜って、祕帳としたいと思います。…）」[65]（一六九九年ごろ）と記したり、張鼎望は寄せた書簡の割り注部分に「…檀几叢書止一集二集、虞初新志止得八卷、嗣後如有續編、伏祈惠寄。其紙價明示望當奉補。（…『檀几叢書』は一集〈初集〉・二集止まりで、『虞初新志』はただ八卷だけしか持っていません。その後もし續編がありましたら、お惠み下さることを祈っております。紙代を明示して下されば進呈致します）」[66]（一七〇一年ごろ）と記している。これは、まるで期刊雜誌のように、『虞初新志』が完成した分から順に文人たちの手元に屆けられていたということなのではないだろうか。

前述の通り、現存の『虞初新志』にはテキストによって若干作品の追加や書名の異同が見られることから、總跋が附

された一七〇〇年以降も編集作業が續いていたと考えられる。

ところで、十二卷から二十卷への編集期間がかなり空いたのは何故であろうか。今の時點ではっきりとしたことは言えないが、恐らく他の叢書編纂との絡みではなかっただろうか。一六九〇年代中ごろから『檀几叢書』、『昭代叢書』の編纂も竝行して行われるようになり、時間や勞力がそれに割かれることになったこと、またどの叢書にどの作品を載せるかという選定に手間がかかったことなどが考えられる。實際に、同じ作者の作品が3つの叢書に分散して收められていることも珍しくないし、『檀几叢書』の凡例には、王士禎の例を擧げて作品を收錄する叢書の選定について言及している。[67] 詳しくは今後他の2つの叢書について論ずる際に述べることとし、本論ではひとまずここまでとしたい。

②採用の可否とその基準

さて、『虞初新志』の凡例④には作品の採用基準として以下のように記している。

一事而兩見者、敍事固無異同、行文必有詳略。如大鐵椎傳、一見于寧都魏叔子。一見于新安王不菴。二公之文、眞如趙璧隋珠、不相上下。顧魏詳而王略、則登魏而逸王、祇期便于覽觀、非敢意爲軒輊。

（一つの話で〈作品が〉複數見られる者は、敍事にはもとより異同がなくても、文章には必ず精粗がある。『大鐵椎傳』の如きは、一つは寧都の魏叔子〈魏禧〉に見られ、一つは新安の王不菴〈王煒〉にも見られる。二人の文章は、まことに趙璧や隋珠のようで、甲乙つけがたい。魏〈禧の記述〉は詳細で、王〈煒の記述〉は簡略なので、魏〈禧の作品〉を登用して王〈煒の作品〉を外すことにした。〈これは〉ただ閲覽に便を期すためであって、優劣によったわけではない）

實際に魏禧「大鐵椎傳」（『虞初新志』巻一）は收められているが、王煒のものは收められていない。[68] このように、『虞初新志』は入手した作品を無制限に採用するのではなく、ある一定の基準によって採用の可否を判斷していたことがわかる。むろん、魏禧が著名な文章家であった、ということも關係していないとは限らないが。

いずれにせよ、凡例でこのように擧げた、ということは他にも同様の例があったということが推測される。實際、書簡には「義犬」に關する作品をめぐるやりとりが複數存在する。以下、その例についていくつか書簡を擧げてみよう。

吳肅公が寄せた書簡に「…及向五人傳曾附虞初乎、有義犬見拙集中亦幷附入爲妙。…（先の『五人傳』は『虞初新志』に附されましたが、義犬〈に關して〉も拙集中に見られるものがありますので、また入れて頂ければ素晴らしいことです。）」[69] と述べている。吳肅公は張潮と同鄕の友人で、叢書に多數作品が掲載されており、[70] 張潮にとっても貴重な作家の一人であった。すでに『虞初新志』には吳肅公の「五人傳」〈巻六〉が收められており、さらに自ら制作した「義犬」に關する作品を掲載するよう張潮に依頼した。

これに對して、張潮は次のような書簡を寄せている。

貴門人李年兄到、得接瑤函兼拜讀。禮問及明語林之贈、不啻錫以百朋、謹謝教。尊作五人傳已借光梓入虞初新志中。其義犬一篇、文雖甚佳、然義犬事頗多載之、不勝其載。是以不得不割愛耳。

（あなたの門人である李先輩がおこしになり、お手紙を下さり拜讀致しました。〈あなたの著作である〉「讀禮問」〈『昭代叢書』乙集所收〉および『明語林』[71] を頂戴して、ただ素晴らしいお寶を得たばかりではございません。謹んでお禮申し上げます。ご著書の「五人傳」はすでにご威光をお借りして『虞初新志』中に入れさせていただきまし

た。「義犬」に關する一篇は、文章はとても素晴らしいのですが、ただ義犬の事は〈『虞初新志』中に〉多く載せており、すべて掲載しませんでした。そこで割愛せざるを得なかったのです[72]

實際に『虞初新志』に掲載されたのは、徐芳の「義犬記」（巻七）であった。徐芳の「義犬記」の末尾に附された張潮の評語に「義犬事不一而足。特録此篇者、以其事爲尤奇也（義犬の事は一つだけではありません。特にこの作品を收録したのは、とりわけ奇拔〈素晴らしい〉な記事だからです）」とある。

また、王晫に寄せた書簡で「宣城吳街南先生曾輯聞義一書。人之中有義僕、義婢、義閹、義倡、義優、義胥、義兵、義丐之種種、物之中有義禽、義獸、義蟲之種種。彼曾以義犬記一篇囑入拙選。弟以義犬事多、不勝其載、辭之承詢（宣城の吳街南〈肅公〉先生はかつて『聞義』一書〈不詳。人・物の「義」なる者を集めたもの？〉を編纂されました。人の中には義僕、義婢、義閹、義倡、義優、義胥、義兵、義丐の種種がおり、物の中にも義禽、義獸、義蟲の種種がおります。彼からかつて『義犬記』一篇を拙選に入れるよう頼まれました。〈しかし〉義犬の話が多く、掲載することができないため、お斷り致しました[73]）」とある。

なお、吳肅公の「義犬」に關する作品は、王葆心編『虞初支志甲編』[74]巻一に「書義犬事一卷」が收められている。

ちなみに、前述の王士禎『皇華紀聞』にも元々「義犬」に關する話が存在していたが、『虞初新志』に節錄された中には含まれていない。

次は掲載方針に合わない作品は、掲載しないという例である。錢岳の『金衣公子傳』の例を見てみよう。錢岳は書簡で「…虞初新志一書、蒐羅之文愈出愈奇。晩當留心。可採者卽郵筒報命。拙作金衣公子傳呈敎。未識可入集中否。（…

『虞初新志』一書は、收められた作品は出れば出るほど素晴らしい書です。〈以下「晩當留心」意味不明〉採用すべき作品があればすぐに郵筒で命に報じます。拙作「金衣公子傳」を呈上致しましたが、まだ集中に入れていただけないのでしょうか[75]」と述べている。

これに對する書簡だと思われるが、張潮は「金衣公子傳筆致幽雋、讀之不能釋手、直與悔菴先生之雪衣娘、湯卿謀之採香使者共垂不朽矣。敬服敬服。但虞初拙選、唯實事之奇者、方爲載入。弟尚另有外史之輯、自當借光首錄金衣傳大作也。(「金衣公子傳」は筆致が素晴らしく、讀み出したら手が離せないほどで、ただ悔菴先生〈尤侗〉の「雪衣娘[76]」の話や湯卿謀〈湯傳楹〉の「採香〈春〉使者[77]」の話とともに不朽の名作です。敬服の至りです。しかし小生の『虞初新志』は、ただ實際の出來事の奇特な作品だけを採錄しています。さらに別に外史の編輯が有りましたら、必ずやご威光をお借りして「金衣傳」を卷頭に採錄させて頂きます[78])」と答えている。

作品が遺っていないので確かなことは言えないが、「金衣公子」とはウグイスの異稱であり、『開元天寶遺事』によると、唐の玄宗皇帝が宮廷の庭園で呼んでいたとするので[79]、或いは玄宗皇帝がらみの話であろうか。いずれにせよ、『虞初新志』の採用基準に合わないために取り入れなかった、ということである。

③書名・內容の變更

『虞初新志』には、元來書名が全く異なっていた作品が存在する。王言「聖師錄」〈原名「物表識略」〉がその一つである。王言(字は愼旃、浙江錢塘の人)は王晫の息子である。書簡に「…虞初新志蒙載兒子拙編、欲求印全樣一帙、未審可否。…(『虞初新志』に我が子の拙作を載せていただき、一帙すべての印刷を求めましたが、まだ可否のご返事がございません[80])」とあるので、どうやら王言の父の王晫が『虞初新志』に掲載するよう依頼したようである。それに對

して張潮は王晫に以下のような書簡を寄せている。

令郎物表識略、確宜入虞初新志中、但內有已見拙選者、如卷髯丐子之猴、吳孝先家之牛、…至物表識略之名則未免可商。〈中略〉今于二者皆無所準、或仍名聖師錄如何。

（ご子息〈王言〉の「物表識略」ですが、確かに是非に『虞初新志』中に入れるべきだと思いますが、ただその中にすでに拙選に見られる者がございます。例えば、卷髯丐子の猴〈宋曹「義猴傳」［卷1］〉、吳孝先家の牛〈陳鼎「義牛傳」［卷十一］〉のようなものです。〈…〉「物表識略」という作品名は、いまだ一考の餘地があります。〈小塚注―以下、張潮は「物表」の「表」について、元來二種類のタイプがあり、一つは正史の「表」［一覽表］、もう一つは「出師表」に代表される上奏文としての「表」である、と說明する〉[81]…今〈ご子息の「表」は〉以上二者どちらにも準據していないので、あるいは「聖師錄」と名附けては如何でしょうか[82]）

王言の「聖師錄」は『虞初新志』卷十八に收められているが、內容は白鷴・鶴より象・鹿・熊・魚・鼈・蟹・蝌蚪・蜂など聖人が師とすべき動物たちの立派な行いについて記錄した作品である。この作品について、張潮はまず前述の「義犬」と同じく、內容として重複するものに關しては、節錄するという方向で考えている。そして次に原名の「物表識略」では適切な題名ではないとして、「聖師錄」という名にするよう提案している。

これに對する返信は見當たらないが、實際に題名は「聖師錄」となっているので、了承したのであろう。

その後、王晫は以下のような書簡を張潮に寄せている。

五月十一日始接四月初四日臺札、並聖師錄數十册既蒙雕刻、又叨紙價印資。先生隆情有加無已。不知小子言圖報在何日也。孝匈拙傳又蒙采入虞初。…

（五月十一日、やっと四月四日のお手紙に接し、『聖師錄』數十册は既に版刻されたとのこと。さらに紙代印刷代も持っていただき、先生のご厚情は留まるところがございません。小生があなたのご恩に報いるのはいつになることでしょうか。孝匈拙傳〈『虞初新志』卷十五所收〉はさらに『虞初〈新志〉』に採錄されました。…[83]）

これは一七〇四年か五年あたりに寄せられた書簡のようであるが、この頃には『聖師錄』は『虞初新志』に收錄され、しかも抜き刷りとして印刷され、王晫の元に届けられていたことがわかる。

おわりに

以上、『虞初新志』の編集狀況について、張潮の書簡を中心に考察してきた。書簡は當人同士しか知り得ない內容を多分に含んでいるため、難解で意味不明な部分も多いが、『虞初新志』編纂の背景、とくに文人同士の交流についてある程度その一端が窺えたと思う。今後は『檀几叢書』および『昭代叢書』についても同様に書簡から編集狀況を考察してみたいと思う。以上のことを一段階として、ひいては、當時の江南文人ネットワークや、出版文化の實態にさらに迫っていきたいと考えている。

〈参考資料〉

表1．『尺牘友聲集』中の『虞初新志』に關する書簡（各卷別）

卷數	虞初	總數	年代（西歴）	No.（差出人）
甲	2	97	一六八〇以前	72（王煒）、90（徐崧）
乙	4	94	一六八九以前	104（汪聞遠）、165（鄧漢儀）、166（巫敬輿）、168（殷署）
丙	4	94	一六八九以前	201（顧彩）、246（宋曹）、270（錢岳）、274（吳肅公）
丁	9	82	一六九二	317（顧彩）、321（顧彩）、326（顧彩）、345（殷署）、348（陳鵬）、355（殷署）、357（錢岳）、363（江之蘭）、370（閔奕佑）
戊	6	85	一六九三	373（吳從政）、376（宗元鼎）、378（錢岳）、387（余懷）、427（程雲鵬）、455（蔣魯封）
己	0	63	一六九四	なし
庚	5	76	一六九五	521（陳軋）、539（王煒）、547（王棠）、549（王棠）、581（王弘文）
辛	4	59	一六九六	623（錢岳）、626（陳鼎）、627（宋永貽）、644（沈廷瑞）
壬	5	63	一六九七	659（王晫）、669（王晫）、688（李淦）、700（王士禎）、705（聶先）
癸	4	52	一六九八	741（陳鼎）、746（汪穎）、755（陸次雲）、766（王晫）
一	3	60	一六九九	775（王士禎）、802（王晫）、827（王晫）

二	2	55	一七〇〇	839（閔麟嗣）、864（王轂）
三	1	35	一七〇一、二	889（張鼎望）
四	4	39	一七〇三、四	927（劉彬）、946（王晫）、947（褚人穫）、955（吳雯炯）
五	3	55	一七〇五	971（王晫）、980（葛常夏）、1007（張鼎望）

※No.—拙稿「張潮『尺牘友聲集』『尺牘友聲偶存』研究資料編」表2の書簡通し番號
※虞初—『虞初新志』關連の書簡數　※總數—卷全體の書簡數　※年代—推定制作年代

表2．『尺牘友聲偶存』中の『虞初新志』に關する書簡（各卷別）

卷數	虞初	總數	年代（西歷）	No.（宛名）
一	2	55	一六八〇前後	44（吳肅公）、51（顧彩）
二	3	48	一六八九以前	61（甘表）、73（錢岳）、78（余懷）
三	3	35	一六九五以前	104（余懷）、112（張惣）、113（王晫）
四	0	44	一六九五	なし
五	1	39	一六九六、七	185（王士禛）
六	3	30	一六九七、八	240（陸次雲）、245（王晫）246（高士奇）
七	6	43	一六九九	253（王晫）、255（王士禛）272（張榕端）、280（陸次雲）、281（張榕端）、286（毛奇齡）

八	1	44	一七〇〇	311（王棠）
九	3	42	一七〇一	343（王晫）、355（楮人穫）、362（王晫）
十	4	48	一七〇二、三	397（吳肅公）、398（王晫）、403（張鼎望）、418（葛常夏）
十一	0	28	一七〇四、五	なし

※No.―拙稿「張潮『尺牘友聲集』『尺牘友聲偶存』研究資料編」表3の書簡通し番號

表3．張潮の書簡に見られる『虞初新志』に關する書簡の宛名（偶存）と差出人（友聲）〈五十音順〉

No.	氏名	字・號・出身	偶（總／虞）	友（總／虞）	備考
1	殷曙	字は日戒、號は竹溪。安徽歙縣。	3／0	20／3	
2	王煒	字は雄石、號は不菴・鹿田。安徽歙縣。	3／1	14／1	
3	王轂	字は椒却。江蘇江都。	1／0	1／2	
4	汪頴	字は遯漁。安徽歙縣。	0／0	1／1	
5	王弘文	字は器先。福建建州。	0／0	2／1	
6	王士禛	字は貽上、號は阮亭・漁洋山人。山東新城。	18／2	12／2	作者（2）―劍俠傳〈九〉・皇華紀聞〈九〉
7	王晫	字は丹麓、號は木菴。浙江仁和。	35／6	28／7	作者（3）―紀陸子容事〈九〉・看花述異記〈十二〉・孝丐傳〈十五〉

8	王棠	字は名友、號は勿翦。安徽歙縣。	2／0	3／2	
9	汪鶴孫	字は聞遠、號は梅坡。安徽黄山。	2／0	12／1	
10	葛常夏	字は文度。江蘇淮安。	3／1	3／1	
11	甘表	字は中素。	1／1	1／0	作者（1）―趙希乾傳〈八〉
12	顧彩	字は天石、號は夢鶴居士。江蘇無錫。	4／1	14／5	作者（2）―焚琴子傳〈四〉・髯樵傳〈八〉
13	吳從政	字は聖聞。安徽歙縣。	1／0	5／1	
14	吳肅公	字は雨若、號は晴嵒・街南。安徽宣城。	7／1	17／1	作者（1）―五人傳〈六〉
15	吳陳琰	字は寶崖。浙江錢塘。	7／1	8／0	作者（1）―紀老生妄訟〈十四〉
16	吳雯炯	字は鏡秋、號は笙山草堂。安徽歙縣。	0／0	1／1	
17	江之蘭	字は含徵、號は文房。安徽歙縣。	13／0	15／1	
18	高兆	字は雲客、號は固齋。福建侯官。	1／1	1／0	
19	徐崧	字は松之、號は臞菴。江蘇吳江。	1／0	3／1	
20	蔣魯封	字は望藩。湖北漢陽。	0／0	1／1	
21	沈廷瑞	字は兆符。安徽宣城。	1／0	1／1	
22	錢岳	字は蘊生、號は十青。江蘇蘇州。	1／1	11／4	
23	宗元鼎	字は定［鼎］九、號は梅芩。江蘇江都。	2／0	4／1	作者（1）―賣花老人傳〈四〉

24	宋曹	字は彬臣、號は射陵。江蘇鹽城。	0／0	2／1	作者（2）―義猴傳〈一〉・鬼孝子傳〈六〉
25	宋永貽	字は汝吉。江蘇鹽城。	0／0	1／1	
26	褚人穫	字は稼軒。號は石農。江蘇長洲。	2／1	2／1	
27	張惣	字は僧持、號は南村［邨］。江蘇江寧。	2／1	4／0	親族。
28	張鼎望	字は荊觀、號は冷公・渭濱。陝西涇陽。	9／1	6／2	親族。
29	張榕端	字は樸園。河北磁州。	2／1	1／0	
30	陳軾	字は葯聞、號は道開。江蘇雲閒。	1／0	3／1	
31	陳鼎	字は定九、號は子重・留溪。湖南黔中［浙江江陰とも］。	1／0	7／2	作者（13）―毛女傳〈九〉・王義士傳〈九〉・雌雌兒傳〈九〉・愛鐵道人傳〈十〉・狗皮道士傳〈十〉・烈狐傳〈十〉・八大山人傳〈十一〉・嘯翁傳〈十一〉・活死人傳〈十一〉・義牛傳〈十一〉・彭望祖傳〈十二〉・薛衣道人傳〈十二〉・孝犬傳〈十二〉
32	陳鵬	字は扶九。	0／0	2／1	
33	程雲鵬	字は西頑、號は培風・鳳雛。安徽歙縣。	1／0	5／1	

34	鄧漢儀	字は孝威。江蘇泰州。	0／0	3／1		
35	閔奕佑	字は右丞。	3／0	2／1		
36	閔麟嗣	字は賓連、號は檄庵。安徽歙縣。	0／0	9／1		
37	巫敬輿	字は德士。安徽當塗。	0／0	1／1		
38	毛奇齡	字は大可、號は西河。浙江蕭山。	2／1	1／0	作者（4）—曼殊別誌書磚〈十三〉・陳老蓮別傳〈十三〉・桑山人傳〈十三〉・瘞水盞子銘〈十四〉 作者（2）—寄暢園聞歌記〈四〉・王翠翹傳〈八〉・［板橋雜記〈二十〉※後錄］
39	余懷	字は澹心、號は曼翁。福建莆田。	8／2	14／1	
40	李淦	字は季子、號は礪園。江蘇興化。	1／0	1／1	
41	陸次雲	字は雲士。浙江錢塘。	2／2	5／1	作者（6）—紀周侍御事〈七〉・寶婺生傳〈九〉・沈孚中傳〈十〉・北墅奇書〈十〉・圓圓傳〈十一〉・湖壖雜記〈十二〉
42	劉彬	安徽歙縣。	0／0	1／1	

※總／虞—各人物の書簡集に收錄されている書簡の總數／『虞初新志』に關する書簡數。　※作者—『虞初新志』に作品が收錄されている者。（　）は收錄作品數。作品名下の〈　〉は所在卷數。

※參考—出身地別一覽　山東新城1　安徽14（歙縣10・黃山1・宣城2・當塗1）　揚州2　浙江5（仁和［杭州］1・蕭山1・錢塘2）　江蘇11（淮安1・無錫1・吳江1・蘇州1・鹽城2・長洲1・江寧1・雲閒1・泰州1・興化1）　福建3（建州1・侯官1・莆田1）　湖北漢陽1　湖南黔中1［浙江江陰とも］　陝西涇陽1　河北磁州1　不明4

注

（1）『漢書』卷三十・藝文志

（2）『虞初志』（虞初志合集之一・上海書店・一九八六年）解說2頁參照。

（3）なお、『虞初新志』の後、清・鄭澍若『虞初續志』二十卷（嘉慶7〈一八〇二〉年自序）や清末～民國以降には『虞初支志』『虞初近志』『虞初廣志』など所謂「虞初系列」の叢書が數多く編纂された。また、日本でも明治に至って菊地三溪の『本朝虞初新誌』が作られたが、『虞初新志』の影響を受けている。詳しくは泰川「明清〝虞初體〟小說總集的歷史變遷」（『明清小說研究』二〇〇二年・第二期）などを參照。

（4）例えば、古本小說集成（上海古籍出版社影印本）の佘德餘が制作した前言に「據張潮《自敍》，本書成于康熙二十二年癸亥（一六八三），但所輯的作品又有康熙四十年（一七〇一）之後問世的鈕琇的《觚賸》，則此書在其生前曽有過增益」とある。

（5）「『虞初新志』異本考」（『汲古』24號・一九九三年十一月）、「『虞初新志』の初出原本について」（『中國古典小說研究動態』最終號・一九九四年六月）

（6）詳しくは拙論「張潮編纂の叢書について—編集狀況を中心に—」（大東文化大學『漢學會誌』53號・二〇一四年三月）參照。

（7）「序爵序齒、從來選政所無。或後或先、總以郵筒爲次。不能虛簡以待、亦難縮地以求。隨到隨評、卽附剞劂之手。投函投刺、勿

煩酬酢之勞。次第未可拘拘、知交定稱爾爾」

(8) 「鄙人性好幽奇、衷多感憤。故神仙英傑、寓意四懷。外史奇文、寫心一啟。生平罕逢祕本、不憚假抄。偶爾得遇異書、輒爲求購。第愧搜羅未廣、尤慚采輯無多。凡有新篇、速祈惠敎。竝望乞鄰而與、無妨擧爾所知」

(9) 「是集祇期表彰軼事、傳布奇文、非欲借逕沽名、居奇射利。已經入選者、儘多素不相知。將來授梓者、何必盡皆舊識。自當任剞劂之費、不望惠梨棗之資。免致浮沉、早郵珠玉」

(10) 小塚由博「張潮の交遊關係について—『尺牘友聲集』及び『尺牘友聲偶存』を手がかりに—」(大東文化大學『漢學會誌』52號・二〇一三年三月)

(11) 初集〈前集〉[甲・乙・丙・丁・戊集]、二集〈後集〉[己・庚・辛・壬・癸集]、三集〈新集〉[卷一～五]

(12) ともに北京圖書館(北海公園古籍館)、天津圖書館、アメリカ國會圖書館等に所藏。乾隆庚子[四十五年・一七八〇]秋鐫・心齋定本・本衙藏版。
本論では「臺灣國家圖書館古籍影像檢索系統」(http://rarebook.ncl.edu.tw/rbook.cgi/hypage.cgi?HYPAGE=home/rbook_home.htm)の畫像データ(アメリカ國會圖書館本)を利用する。

(13) 「張潮『尺牘友聲集』『尺牘友聲偶存』研究資料編」(大東文化大學『中國學論集』30號・二〇一二年十二月)『友聲』は表2、『偶存』は表3の通し番號による。

(14) 『偶存』112(卷三)「寄南邨」

(15) 『偶存』272(卷七)「上閣學文宗張樸園先生」

(16) 『友聲』166(乙集)

(17) 『友聲』270(丙集)

(18) 「…心齋詩集并虞初新志乞各寄惠一部」

(19) 「…心齋詩集及虞初新志千祈郵惠各一部。…」

(20) 「…只韻牌・虞初集・下酒物三種乞賜。…」

(21) 「…佳刻如心齋詩集・友聲・閨訓十三篇・韻牌・聯莊・虞初新志、幸各賜一部如何」

(22) 「…尊刻虞初新志不識可惠一部否」

(23) 『友聲』927(新集卷四)

(24) 『友聲』317（丁集）
(25) 『友聲』357（丁集）
(26) 『友聲』168（乙集）
(27) 「…虞初新志被友人攫去。幸再惠一册感感。…」
(28) 「…尊刻虞初新志中聞曾採拙作。倘有印本乞賜我一册以便。廣爲徵採彙成奇觀。非敢屢索。以前所惠者竟爲友人奪去、弟反空手耳」
(29) 「…前蒙贈虞初志并友聲集俱爲友人奪去、不意昔日之曹邱、今竟作寄書郵矣。乞再附數本以慰渴。懷餘不及」
(30) 『友聲』539（庚集）
(31) 『友聲』746（癸集）
(32) 『偶存』61（卷二）「復甘中素」
(33) 『友聲』955（新集卷四）
(34) なお、王潔の書簡は見當たらない。
(35) 『偶存』245（卷六）「復王丹麓」
(36) 陸次雲の作品は、『虞初新志』に3、『檀几叢書』に1、『昭代叢書』に3作品が收められる。
(37) 『偶存』240（卷六）「與陸雲士」
(38) なお、陸次雲との書簡のやりとりについては、拙論「張潮と江南文人の交流——書簡を手がかりに——」（『中國古典小說研究』18號・二〇一四年三月）を參照。
(39) 『偶存』185（卷五）「與王阮亭先生」
(40) 『王士禎全集』（齊魯書社・二〇〇七年、全六册）第三册、『漁洋詩集』卷六、一六一七—一六一九頁。
(41) 『虞初新志』に2、『檀几叢書』に3、『昭代叢書』〔甲～丙集まで〕に6作品が掲載されている。
(42) 『虞初新志』に2〔＋1〕、『檀几叢書』に1、『昭代叢書』に2作品が掲載。
(43) 『友聲』387（戊集）
(44) 『偶存』104（卷三）「寄余澹心徵君」
(45) なお、余懷と張潮の交遊關係については、拙論「余懷と張潮—作者と編者の關係を中心に—」（『大東文化大學紀要（人文科學

編）』51號・二〇一三年三月）を参照

(46)『友聲』659（壬集）

(47)『友聲』669（壬集）

(48)『友聲』700（壬集）

(49)『王士禎全集』第四册、二六四七―二七六八頁

(50)『王士禎全集』第三册、一六一七―一六一九頁

(51)『王士禎全集』第四册、二五二七―二五九七頁

(52)但し、前掲『王士禎全集』では『蠶尾續文集』卷九（第三册・二一〇五―二一〇七頁）に收められている。

(53)長洲の韓某が制作した序文に「新城王先生詩古文雄一代、學無所不窺、博物君子也、康熙二十三年奉命有事於南海、道閒所經都邑、地理、山川、人物、與夫荒墟伏莽之遺跡、鳥獸草木、非常可喜之奇怪、搜討捃摭、薈萃風別、爲《皇華紀聞》四卷、《南來誌》一卷、《北歸誌》一卷、《廣州遊覽小誌》一卷」云々とある。

(54)もともと、『皇華紀聞』には282條の話が收められているが、そのうち『虞初新志』に收められたのは13條である。

(55)『友聲』775（新集卷一）

(56)『偶存』255（卷七）「寄總憲王阮亭先生」

(57)『張潮研究』（安徽大學出版社・二〇一一年）24頁〈「張潮年譜」一六八三年〉に「小說集《虞初新志》八卷編纂初成」とある。

(58)『友聲』376（戊集）

(59)『偶存』245（卷六）「復王丹麓」

(60)『友聲』766（癸集）

(61)『偶存』280（卷七）「與陸雲士」

(62)『偶存』281（卷七）「寄謝閣學文宗張樸園先生」

(63)『偶存』397（卷十）「寄吳寶崖」

(64)『偶存』403（卷十）「復張渭濱」

(65)『友聲』827（新集卷一）

(66)『友聲』889（新集卷三）

(67)『檀几叢書』二集凡例に「新城王阮亭先生郵種種小品、美不勝收。因篇目已定、不獲全登爲憾、嗣當採入昭代叢書乙集以成鉅觀」とある。

(68) 王煒の作品は、『昭代叢書』に2種收められている。

(69)『友聲』274（丙集）

(70)『虞初新志』に1、『檀几叢書』に1、『昭代叢書』に5作品。

(71)『明語林』十四卷補遺一卷（『四庫全書存目叢書』子部・第245册、『續修四庫全書』第1175册）

(72)『偶存』44（卷一）「與吳街南徵君」

(73)『偶存』362（卷九）「寄王丹麓」

(74) 虞初志合集合集之四・上海書局・一九八六年

(75)『友聲』378（戊集）

(76) 尤侗「雪衣女傳」（『西堂雜組』卷五）

(77) 湯傳楹「採春使者傳」（『湘中草』卷五）

(78)『偶存』73（卷二）「復錢十青」

(79)『開元天寶遺事』天寶上に「明皇每於禁苑中見黃鶯、常呼之爲金衣公子」とある。

(80)『友聲』946（新集卷四）

(81)「據自序引班固古今人表［云云］、殊不知文體中之有表、止有二種。其一爲年表、其體定是橫列如某年某國有某事、某國有其事。推之世表月表、莫不皆然。卽古今人表亦是分爲上中下九層上上有某人某人、上中有某人某人、竝無每叚。直書一行到底者。又一種如出出師表陳情表之類、此則奏疏之別名」

(82)『偶存』362（卷九）「寄王丹麓」

(83)『友聲』971（新集卷五）